主 論 文 の 要 旨

Changes in body composition after gastrectomy - comparison between distal gastrectomy and total gastrectomy

胃切除後の体成分の変化　－幽門側胃切除と胃全摘を比較してー

東京女子医科大学第二外科学教室
（主任：亀岡信悟教授）
山口　隆介

東京女子医科大学雑誌　第８４巻　臨時増刊号　Ｅ３８９頁～Ｅ３９６頁
（平成２６年１１月発行）に掲載

【要　旨】

今回我々は、当科で胃切除を行った患者に対して生体電気インピーダンス法を用いた体成分測定を行い、胃切除後患者の体成分の特徴を検討した。対象は胃癌に対して当科で幽門側胃切除(DGR 群 108 人)、もしくは胃全摘(TGR 群 37 人)を施行した患者計 145 人とし、両者の比較を行った。測定項目は、術前後の体重、脂肪量、体細胞量（ＢＣＭ）とした。ＢＣＭは栄養状態を反映する量として、その有用性が報告されている。さらに我々は、対象患者を術後経過期間が 24 カ月未満の早期群と、24 カ月以降の後期群に分け、両者の比較を行い、長期的な変化も検討した。結果、脂肪量は DGR 群より TGR 群の方が有意に低かった。ＢＣＭは、有意差を認めなかったが DGR 群より TGR 群の方が低い傾向にあった。早期群と後期群を比較した結果は、ＤＧＲ群においては、早期群と後期群の間に各項目で有意な違いを認めなかった。しかし、ＴＧＲ群では、早期群に比較し後期群では脂肪量が有意に高値であった。また、ＢＣＭは後期群の方が低い傾向にあり、ＢＣＭが低下している症例の割合は、後期群の方が有意に高かった。今回の結果より、幽門側胃切除では、長期的な変化は起こりにくい一方で、胃全摘では、長期的に脂肪量が上昇し、ＢＣＭは低下する傾向がわかった。胃全摘後では長期的に低栄養状態になりやすいことが示唆された。